

福祉援助者の自己覚知を支援する リフレクティブ・アプローチに関する事例研究

A Case Study of Reflective Approach for Self-awareness of a Helping Profession

大山 博幸

Hiroyuki OYAMA

和文要約

福祉援助者は、実施する援助の内実（サービスの質）の向上のため、自らの援助実践を改善していくことが求められ、その際、絶えず自己覚知を重ねていくことが不可欠である。本研究では、このような援助者の自己覚知（気づき）を促す具体的手法の一つとしてリフレクティブ・アプローチ（以下、R・A）を提案する。R・Aにより現場の福祉援助者が自己覚知（気づき）を獲得していくその過程と意義を、事例において示した。R・Aはスーパービジョンの具体手続きとして、または援助者のための学習支援ツールとして提案できるものと考えられる。

1. はじめに：問題意識と研究の目的

(1) 自己覚知の必要性

福祉領域の援助者（以下援助者）におけるその援助実践は、自らが所属している組織の機能に規定されつつも、その内実は同時にまた、援助者の態度や存在そのものといった次元にも大きく左右される。

援助者がクライアントとかかわる際において、援助者個人の持つ価値観、援助における諸前提、あるいは未完了な問題に無自覚なままでは、クライアントの十分な理解及びクライアントとの信頼関係の形成が妨げられてしまう。そのために援助者は自分の価値観、諸前提、未完了な問題の自覚に努めることが求められる。すなわちこの場合、自己覚知とは「自分自身を知る」という意味で自己理解と同義である¹⁾。

援助者は、実施する援助の内実（サービスの質）の向上のため、自らの援助実践を改善していくことが求められ、その際、絶えず自己覚知を重ねていくことが不可欠である。

(2) 自己覚知の2つの側面

福祉援助実践において自己覚知が用いられる状況としては、援助中における「今、ここ」といった状況と、援助後の振り返りでの状況とに分けられる【表1】。前者においては、たとえば援助者自身を援助におけるその道具あるいは資源として位置づけ援助に活用していく、「自己の活用(利用)(G.ハミルトン、F.P.バイステック)」²⁾³⁾といった考え方に代表される。このような自己の活用の問題は、近年においては尾崎(1994)⁴⁾もその重要性を指摘している。すなわち、援助場面での「スキル」としての自己覚知の側面である。

表1 援助において自己覚知が用いられる状況

自己覚知場面の状況	技法・アプローチ	主な側面
利用者との援助中における「今、ここ」での「わたし」への気づき	自己の活用(G.ハミルトン、F.P.バイステック)、行為の中の省察(D.ショーン)、	「スキル」としての自己覚知
振り返りでの「わたし」への気づき	リフレクティブ・アプローチ、プロトコルデータの作成、プロセスレコードなど	「学び」としての自己覚知

これに対して、後者は、「学び」としての自己覚知の側面といえる。この側面においては、自己覚知は援助後の何らかの「振り返り」の中で、伝統的にはスーパービジョンという形態において要請されてきた⁵⁾。一般に、自己覚知の訓練を十分に受けていない援助者が、援助中自分の内部に起きているリアルで微細な感情や意思決定などのプロセスを意識的に気づいていくことは容易でない。それゆえ、まずは援助後の振り返り(reflection)の中で気づきを促すことが求められ、かつこの気づきの積み重ねが援助中の自己覚知を高めていくことにつながると考える。すなわち援助者には自分の援助の改善のために自己の「学び(学習)」もしくは成長が求められるのである。本研究が提案するR・Aはこの後者の「学び」としての自己覚知を促すものである。

(3) 研究の目的

本研究では、このような援助者の自己覚知(気づき)を促す具体的手法の一つとしてR・Aを提案する。最初にR・Aの方法論的立場を述べ、その手続きを明示する。次にR・Aにより現場の福祉援助者が自己覚知(気づき)を獲得していくその過程と意義を、事例において示し言及することを目的とする。

2. リフレクティブ・アプローチ(=R・A)の方法論的立場

(1) リフレクションとは

リフレクション(reflection)とは字の意味から言えば、「ふりかえる」、「ふりかえってよく考える」ということである。D.ショーン(1983)は、技術的合理性に基づいた専門家の知識・技術に対する批判の中、専門家が自らの実践の中で自分自身を省察し行為によって実践を改善していくことを「行為の中の省察(reflection in action)」と呼び、そのような専門家を「省察的実践家(reflective practitioner)」と呼んだ⁶⁾。このようなリフレクションに関する研究

は、日本においては、主に教育領域で報告されている。そこでは教師が自分の授業の振り返りを取り入れた授業研究である「授業リフレクション」と呼ばれる方法が試みられており、その代表的な論者として澤本（1996）、藤岡（2000）が挙げられる⁷⁾。

福祉領域においてもいくつかこのリフレクションに関する報告がある。須藤（2002）は、「現場で働くソーシャルワーカーは、このような（ショーンの言う）＜行為のなかの省察＞を言葉に置き換えて、他の人に伝えるという努力をあまりしてこなかった」と述べ、「ソーシャルワークの経験の多義性や厚みを記述する努力が、現場のなかの省察に依拠した＜反省的实践家＞としてソーシャルワーカーを有用なものにしてくれる」と主張している⁸⁾。大山（2000）は、自身が特養の生活相談員として実施する複数のスタッフとのケースカンファレンス実践を自己リフレクションの手法により捉えなおし、その実践的知見を明らかにしている⁹⁾。真鍋（2005）は、介護技術教育において、現象学をその方法論の中核にすえた「リフレクティブ・プラクティス」ツールを開発しその実施を試みている¹⁰⁾。

筆者はここで、リフレクションを、「援助者の実践の改善に寄与する気づきの獲得を目的とした、援助者の振り返りのプロセス」と定義し、その具体的な手続きをR・Aと呼ぶことにする。

福祉援助は、それが臨床的实践である以上、援助者自身を持ってなされるものである。言い換えれば、福祉援助の内実は援助関係の中で援助者という主体を経由して生じる。ゆえに自己覚知を目的としたリフレクションの具体的作業とは、援助者自らによる自身のパースペクティブ（みえあるいは主観）の吟味でなければならない。このパースペクティブによって、援助者は各々の援助実践に対して意味づけしその実践状況を理解している。つまり援助者は自らのパースペクティブによって福祉援助的現実を構成するといえる。通常、福祉援助を日常に営んでいる援助者においては、自身のパースペクティブおよびそれによる福祉援助的現実の構成の過程を意識することはない。R・Aはこの援助者自身の暗黙となっている内的な領域に焦点を当てる。R・Aで求める自己覚知（気づき）の対象はこの福祉援助的現実を構成するその意味づけやパースペクティブである。リフレクションとは、この暗黙となっているパースペクティブ及びそれによって構成される福祉援助的現実を意識化し捉えなおす営みである。パースペクティブ及びそれによって構成される福祉援助的現実はその援助者自身に在所するものであるがゆえに、それらを真に明らかにすることができるのもその当の援助者自身である。そして、これらの意識化と捉えなおしは当の援助者自身によって真に了解されなければ援助者の変容はありえず、したがって利用者との援助関係に質的な変化をもたらさない。それゆえに、援助者は自分の援助実践を自らの言葉で記述し語ることが求められるのである。リフレクションによって得るこの言葉や語りはたとえそれが未熟だとしても援助者自身の身をくぐって出たそれである必要がある。これら言葉や語りが主観によって吟味され磨かれていくことで、援助者はショーンの言う「行為の中の知」¹¹⁾の明確化、あるいは「臨床の知」（中村、1992）¹²⁾の獲得に向かうと考える。

以上のことを踏まえながら、R・Aをささえる方法論的立場をさらに、「現象学的アプローチ」と「認知=身体的アプローチ」の2つの側面について言及し、明らかにしていく。

(2) 現象学的アプローチとしての側面

ションによれば、リフレクションの対象は、実践者（すなわち援助者）自身の行為ということになる。そのような援助者の行為は、その実践場面の状況のなかでなされるものである。自身の行為や状況の意味は、援助者自身のパースペクティブ（みえ・主観）によって生じ、意味づけられる。先にも述べたが通常援助者は自分自身のパースペクティブやそれによって付与される意味自体を意識することはない。普段暗黙に行われているこれら行為や状況への意味づけを意識化するために、R・Aでは、まず援助者自身で行為を含めた状況とそれに対する意味を詳細に記述することを求める。援助者自らの実践(行為)の意味づけは、外在的な評価や倫理的に要請される基準によってなされる前に、あくまでも援助者自身の意味づけにより出発すべきである。このような援助者の意味づけを中心とするリフレクションにおいては、「何がよかったか、悪かったか」といった援助者の行為の適切さの程度を、事後の知覚をもとに吟味する前に、記録された記述をもとに、援助場面の中のそのときの「状況の中のわたし」を「生きなおし」、その場で「わたし（または利用者）に何が起きていたのか」「わたし（または利用者）は何をしていたのか」と問うのである。

つまり、対象場面に対する事後の反省的意識を一時保留し、援助者自身の内面過程といった主観的経験を自ら対象化（主観の客観化）し、そのありのままを詳細に記述していくといった意味において、現象学的手法（現象学的アプローチ¹³⁾）をR・Aは含み持っている。

(3) 認知=身体的アプローチとしてのリフレクション

上記で述べたように、R・Aではその手続きにおいて意味記述を求める。意味とは援助者である「わたし」全体と他者及び事物を含む「世界」とのかかわりにおいて固有に生じてくるもの、と考える。そのような意味記述の質と深みは身体（感覚）によって主体的にとらえられる。すなわち、その意味記述が記述した援助者本人にとって「ふにおちる」あるいは「しっくりくる」かどうかは、予めに学習され前提とされた規範意識によってではなく、援助者自らの「身体」によって評価されることになる。このようにリフレクションにおいて、援助者の「身体」は意味生成の場とみなされる。そのことを認知的な営み以上のこととして、リフレクションは「認知=身体的アプローチ」であると呼ぶこととする。

以上、筆者の提案するR・Aはこの2つのアプローチを含むことを特徴とする。

3. リフレクションの構成と手順

筆者は本R・Aを、実施者ひとりで振り返りを行なう自己リフレクションと、研究者との対話形式で行なう対話リフレクションの2つで構成している。

自己リフレクションの具体的手法は幾人かの論者により開発・提示されている。これらに共通する作業は、実践者の実践場面を抽出し（ビデオや録音機材が使用される場合がある）、プロセスレコードに代表されるような場面の再構成や対象者との何らかのかかわり場面における会話スクリプトを最初のデータとして取り扱う。これらのデータを意味づけ展開する手法やデータを解釈する過程、リフレクション実施者へのフィードバックすることの意義は、その論者の方法論的立場により異なってくる。筆者は藤岡（2000）の「授業リフレクション」の手法を主

に用い、応用している¹⁴⁾。リフレクション実施者の固有の意味づけを丁寧に取り上げ、その目的をアウェアネス(気づき)におく藤岡の方法論的立場は、筆者が上記に示した2つのアプローチを含むと考えられ、かつションの思想にも合い通じ、それゆえ臨床的实践である福祉援助実践によく適合すると判断した。

またリフレクションの作業はまず援助者自身で行うことに意義があるが、同時に一人でのみ行うことでの限界もある。それゆえ、リフレクションの結果をシェアする対話者を設定することが望ましい。対話者からのフィードバックで自分では見落としていたあるいは不十分だった気づきを明確化する機会を得ることができる。対話者は気づきの促進者という意味でプロンプターと呼ばれるが、その役割は実践者との関係性においては、スーパーバイザーあるいは、メンターという位置づけになるかもしれない。

対話リフレクションは通常自己リフレクションの手続きで得られた結果をシェアするかたちで実施者と対話者でなされる。対話者は実施者が自己リフレクションの実施過程及びその結果から得た気づきや考察における言葉や語りに対して、何らかのフィードバックを行なう。筆者はこの対話リフレクション時の対話者の中心的な役割はあくまでも実施者の自己覚知のサポートであると考えている。そのためにまず対話の最初の段階では実施者の語りについていき、それらを明確化していくことに努め、自己リフレクションの結果を含めた対話者自身のコメントは、原則終盤に行なうことにしている。

4. R・Aを実施した事例

(1) 事例対象と研究の手順

では、R・Aの実際の事例について報告する。取り上げる実施対象者は、R市S法人における訪問介護事業所に勤務するA氏である。A氏は50代女性で経験年数は6年、訪問介護事業所でホームヘルパーをしており介護福祉士の資格を有する。筆者は本S法人の代表者に本研究の趣旨とそのR・A実施の依頼を伝えたところ、了解を得ることができ、A氏を含む3名の現場の職員の方に実施した。ここでは比較的自己覚知が促され深まりを見せたと思われたA氏の事例を取り上げる。また下記表中に示すA氏の援助場面は利用者の個人特定の配慮のため実際のものに一部変更を加えた。

(2) 研究の手順と結果

実施期間はH17.12~H18.3にかけてで、リフレクションの実際の手順のガイダンスとフォローアップ及び対話リフレクションを1回1時間30分程度約4回実施した。

①まず実施対象者に自己リフレクションとして場面の再構成の記述を求めた。仕事中、気になった場面、腑に落ちなかった場面を各自3場面ずつ、事後の想起により、知覚過程、判断・解釈・意思決定過程、行為・結果過程の3過程の記述を求めた。【表2】は、A氏の抽出した場面の要約である(これらの3場面は一般にヘルパー業務の日常としてしばしば起こる場面であると思われた)。②そしてこれらの過程の記述で実施者がまとまりが感じられるところで区分し、それぞれに対して意味記述を求めた。【表3】はA氏によって再構成された記述の一部である。そしてこの意味記述をひとつずつ用意した名刺ほどの大きさのカードに転記してもらった。次に、得られた意味記述カードを混ぜ合わせそれぞれのカードを何度もよく読んでもらっ

表2 Aの抽出した3つの場面

(※ただし下記に示す援助場面は利用者の個人特定の配慮のため実際のものに一部変更を加えている)

1	急きょ代行で派遣に入った自宅の利用者から、ちらし寿司を作ってほしいと依頼されるが、作り方がわからなかった場面
2	雨のためデイサービスへ行くのを嫌がる利用者へ、何とか送り出そうと対応する場面
3	最近老人保健施設から帰宅した利用者の主たる介護者である息子と、本人のADLについて話題にしている場面

表3 A氏による自己リフレクション記述の一部

(※ただし下記に示す援助場面は利用者の個人特定の配慮のため実際のものに一部変更を加えている)

私が見たこと聞いたこと(知覚)	私の感じたこと、考えたこと(解釈、判断)	私の行為(及び結果)	意味記述	意味番号
「あー、今日は〇〇さんではなかったの?」	事前に連絡してなかったんだ。〇〇ヘルパーじゃなかったからちょっとびっくりしている。他曜日に定期訪問しているいつもの仕事内容でいいのかな? それとも違う内容を要求しているのかな?	〇〇ヘルパーの都合で急遽変更になったこと、事前に連絡しなかったことを詫言「今日何をしましょうか。いつものように買い物から先に?」	利用者が自分が訪問してきたのが不満なのかなと思う。	1
「買い物もあるけど〇〇さんだと思ったからちらし寿司を作ってもらおうと思っていたの。急に変わると何を作ってもらおうか思い浮かばない」と考えている様子。	ちらし寿司を自分で作ってもいいが耳が遠いから聞きながら作るのは大変だな。私がいつもここで作っているメニューにしてくれないかなあ・・・何か他の品を作るんなら時間が足りなくなるからとりあえず買い物リストを早く出してくれないかなあ。	「買い物リスト決まっていますか?決まっているのなら先に買い物してきましょう。その間に作る物考えてもいいですよ」買い物リストを確認して買い物に出かける。	自分のわからないメニューを出されて不安になる。 自分のいつものパターンにもって行きたいと思う。	2 3

た。その際、記述された表層的な言葉のみにとらわれず、その記述が持つ意味に[●]浸ることに努めることを示唆した。③次にこれら意味記述カード相互の関連性を見出す展開作業として、パイルソーティング（山分け作業）¹⁵⁾を求めた。まず意味記述カードを直感的に2つに分けられなくなるまで分け続けるよう指示した。ここでいう直感的とは、自己の身体感覚に基づいた判断を意味し、実施者には「なるべくカードの表面的な表記にとらわれず、そのカード自体が持つ[●]感じによって分けてください」と伝えた。この作業のねらいは、実施者があらかじめ学習して持っている既存の枠組みを一時保留し、暗黙の関連性やものの見方を抽出することとした。④そして分けられたカードの軌跡をあらかじめ用意していた大きな用紙に書いてもらい樹形図の作成とした。また、樹形図の各クラスターごとに名前をつけるよう示唆した。この作業のねらいは、実施者が当初選択した特定の3つの援助場面における事象を越えた（メタな）自己の視点の獲得であった。【図1】は作成されたAの樹形図である。

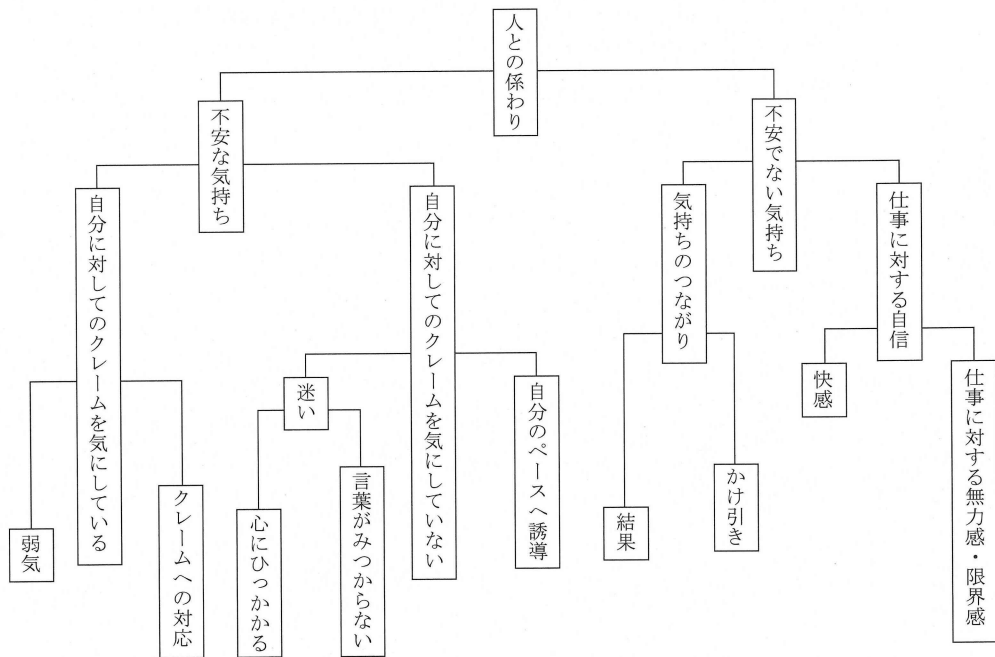


図1 A氏による樹形図

以上、自己リフレクションの結果として得られた樹形図をもとに、研究者を対話者として対話リフレクションを実施した。対話場面は録音テープで記録し、後日研究者が対話時の会話の SCRIPT を作成した。また実施者においては、対話リフレクション終了後、主に作成した樹形図をもとにあらかじめ用意した用紙で考察記述を行ってもらった。上記自己リフレクションによって得た樹形図と対話リフレクション時の SCRIPT、実施者Aの自己リフレクションに対する考察記述をもとに、研究者が分析と考察をおこなった。

表4 Aの意味記述一覧

場面	番号	意味記述
1	1	利用者が自分が訪問してきたのが、不満なのかなと思う
1	2	自分のわけのわからないメニューを出されて不安になる
1	3	自分のいつものパターンにもっていきたいと思う
1	4	クレームがこない一番いい方法がないか思い巡らす
1	5	利用者にやんわりと断られ一安心する
1	6	仕事がないのにいつまでもいない方が良いのではと思う。
1	7	利用者の様子に、早く切り上げることに對して、不満はなさそうに思えた。
2	8	予測していたことが的中し、どうしたら行く気になるか考えをめぐらせる
2	9	行きたいのか本当に行きたくないのか、相手の気持ちが読み取れない
2	10	何とかデイに行ってもらいたいのだが、無理かなとも思いはじめる。
2	11	時間をとって相手の真意を確かめる
2	12	もう一度、別の角度からアタックしてみようと思ひ直す
2	13	入浴の話に切り替えられたと少し安心する
2	14	このまうまくその気になってくれないかなと思う
2	15	とりあえずデイへ行くことが決まってほっとする
2	16	この利用者との接し方のひとつのパターンを見出せた
3	17	娘の笑顔に違和感を感じる
3	18	娘の質問の意図が読みきれずどう答えてよいかわからない
3	19	介護の大変さをヘルパーは十分理解していることを知ってもらいたいが、いい言葉が見つからない
3	20	何とか気分を楽にさせてあげたい
3	21	後味すっきりせず心残りである

(3) 考察1

ここではまず、樹形図及びそれによって得られたA氏の自己覚知の内実を中心に考察する。

①ねがいの明確化

対話リフレクションの最初の段階で、A氏は、樹形図左側にある《自分に対してのクレームを気にしている》という枝に注目し、最近利用者からのクレームがでないようにと気にしながら仕事をするようになった、その反面、仕事の《快感》が、マンネリや慣れのため減った、そして《快感》がなくなったのは「初心」がなくなったためと、語った。ここでA氏にとっての「初心」とは、A33「・・・例えば、私が顔見るとホッとするとか、・・・なんか今まで沈んでたけど、気分がこう明るくなったとか、身体が軽くなったとか、・・・あたしがいるだけでもせめて楽しい気持ちになってもらいたいとか、・・・」という言葉に表されるように、ヘルパーとしての自分が、訪問した利用者のそばにいて、利用者になんらかのよい影響を与えられる存在になりたい、といったものだった。この初心という言葉は、樹形図では直接に表現していないが、対話リフレクション中に《自分に対してのクレームを気にしてい

る》と《快感》というラベルの部分から気づきが進むことで、A氏から出てきた。すなわちA氏は、対話リフレクションの中でヘルパーの仕事における自分の「初心」すなわち、ヘルパーとしての自分のねがいを明確にしていたといえる。しかし、A60：「ここまで自分の気持ちを盛り上げるのにはどうしたらいいかわからないから、ずっと盛り上がっていないんですね、自分の中で・・・」、A83：「てことは、うーん、これが解決した時点で全部ではないですけど、ステップアップ・・・壁なのかな？、今この見えない、自分のもう一つ上へあがろうとする・・・」

という表現にあるように、《初心》を取り戻して「やる気」を出したいが、そのすべがわからないと述べ、そのような今の自分の状況を自分が超えなければならない壁という認識をするものの、A氏における自己のねがいの明確化が必ずしもA氏の問題状況を改善する手立てへの気づきへと、すぐにはつながらなかった。

②意識化が不十分なアセスメント視点

A氏は、《自分に対してのクレームを気にする》というラベルと対照的に《自分に対してのクレームを気にしてない》・《心にひっかかる》ことに注目し、訪問中利用者のクレームを気にするということは別に、利用者の家族に違和感を感じることがあると述べた。

それは、A4：「違和感を感じるのは単純に疑問ですね。いわたりとかそういうのではなくて、疑問」、A6：「・・・このときは単純に疑問だったけど、いろいろなかかわりの中で、帰ったときに後味がすっきりせず、『なんか今日おかしかったなあ』・・・」などの言葉で表現されていた。そこで対話者は、そのA氏の感じた違和感を単なるクレームを気にするということではないアセスメントという専門家の目だとして、その重要性をA氏に指摘するものの、A氏はヘルパーを始めたころはこんなことは思わなかったと認めつつも、対話者の指摘を了解できない様子だった。

A86「そうですね、初めのころはこんなこと思わなかった」

A87「ここまで感じる余裕がなかった・・・」

対話者90：「専門性というか、アセスメントといったけど、専門性が開かれていく、専門家の目なんですよ、まあちょっと・・・すごく重要な感じがしている」

A89：「うーん・・・」

対話者91：「これは、たぶんこの先険しい道（笑）があるかもしれんけれども、あの、開かれている感じがするね。可能性を持っている感じがする、ていうか、探求しなきゃいかん道があるような気がする・・・」

A90「うーん・・・」

すなわち、ここでは、A氏は、利用者の家族に対して生じた違和感を、自分に対するクレームとは異なったものと意味づけるものの、一つのアセスメント情報として、その過程に位置づけ意識化することが不十分だったと考えられる。

③A氏における問題の同定

以上、上記①②から、A氏はねがい獲得のパースペクティブ中心では現場をとらえきれなくなってきている、ヘルパーとしての自己のプロセスとは異なる、利用者のプロセスに触れつつあると考えられる。しかしながらまたそれは、A氏がヘルパー業務において以前に比べ、利用

者とのよりリアルな関係を生きはじめていることでもあると思われた。そのようなA氏の援助実践における課題あるいは同定される問題を専門的自己と個人的自己の2つの次元でとらえるとするれば、専門的自己次元での、A氏の援助実践における学習課題としては、「ヘルパーとしてのアセスメント視点の獲得」であり、個人的自己次元での、A氏の自己成長におけるテーマとしては、「自己のねがいの捉えなおし」ではないかと思われる。

④自己の実践の対象化と了解可能性：

実施者A氏の自己リフレクションによって得られる樹形図は、およそA氏の援助における「見えの世界」の構造や布置をあらわしたと考えられ、これによってA氏は自己の実践を対象化でき、自己覚知が生じやすくなったと考えられる。また、ここで対話者である筆者は、A氏における援助者としての今後の課題を2つの側面から同定し解釈したが、このように対話者(他者)にとっても、実施者の「見えの世界」を了解することが容易になるということが確認できた。

(4) 考察2

ここでは、R・Aによって促されたA氏の自己覚知の特性という面から考察する。

①間主観的に生じる自己覚知：

A氏是对話リフレクション中に自己覚知が生じる前後にしばしば、A36：「・・・、あっそうだ！、今先生に言われてわかった！うん、・・・そうです。手抜きを覚えてたからこれが減ったんですね・・・」とか、A48：「・・・先生とお話している間に、なんで私この仕事していて快感が少なくなっただろうと思ったら、初心がなかった」と述べていた。これはすなわち、A氏の自己覚知が対話リフレクション中の対話者との間で間主観的に生じたと考えられる。このことは対話時の対話者のアプローチや態度が、実施者の自己覚知の内実に影響を与えるということを示唆する<知見1>と思われる。

②実施者が了解できる範囲で生じる自己覚知：

また同じくA氏は自己覚知が生じる前後に、A53：「でも、今言われて先生あらためてわかったんですけど、でも漠然とは気づいていましたね、楽しくないのは・・・(中略)・・・はじめたようなころの気持ちにはなれない、だから楽しくなれない。なんとなく漠然と自分の中の気持ちでは分かっていたね」と述べた。このようにA氏は、対話の中で明確化された自己覚知に対しては、以前から漠然とではあるが自分自身である程度分かっていたともあわせて語っている。

一方、考察1の②では、A氏が利用者の家族に対して感じた違和感は、アセスメントとしての一情報とみなされるのではないかという対話者のフィードバックを、A氏は了解しなかった。つまり、リフレクションの結果及びその実施者の語りから対話者が気づき解釈したことを必ずしも、実施者本人が了解するとは限らないということである。

この2つのことから、A氏がこのR・Aで得た自己覚知は、それをA氏自身受け入れ了解できる準備があるところのもののみ生じた、あるいはその実施者であるA氏のパースペクティブからそうはなれていないところで生じたと言えるのではなからろうか。それゆえ、気づきを促進する対話者は、対話中実施者のパースペクティブをたどり理解に努めることが要求される<知見2>ということが示唆されるとと思われる。

5. おわりに：事例研究の結論・課題

以上、事例においては、R・Aによって実施者が自己覚知を得ていくことが確認され、R・Aが、自己覚知(気づき)を得るための有効な手法であることが示唆された。また固有かつ特殊なものではあるが、R・Aに関する知見が示唆された。示唆されたこれらの知見は、もちろん本事例域を出ないため、これらが一般化に向かうには、さらに事例を重ねることが必要となる。R・Aで得た気づきがどう実施者の援助実践に役立てられていくのかは、本アプローチの今後の継続的な実施と研究が必要となる。

本研究で示したR・Aは、現場の援助者におけるスーパービジョンの一形態として具体的手続きを提案できるものと思われる。福祉援助をその業務とする以上、援助者は自己の実践の改善という学習を生涯にわたり継続していく責任がある。そのような意味で、R・Aは援助者のための学習支援のツールとして活用される可能性ももつ。

※謝辞：本研究にご協力いただきました、R市S法人のA様はじめ同法人の皆様には感謝お礼申し上げます。

注

- 1) 自己覚知の一般的な定義については例えば、日本社会福祉実践理論学会編『改訂版社会福祉実践基本用語辞典』川島書店 p61 1993、『社会福祉用語辞典第2版』ミネルヴァ書房 p121 2001、『現代社会福祉辞典』有斐閣 p164 2003、久保絃章「ワーカークライアント関係におけるコミュニケーション」『社会福祉の基礎知識』有斐閣ブックス p163 1973を参照した。
- 2) G. ハミルトンは、「大衆を援助することを目的とする専門職業ならばどんなものにおいても、自己に関する知識が関係を意識的に利用するにあたって欠くべからざるものとなる。人がもし自己を利用するつもりならば、そのときは自己がどのように作用するかということに気づいていなければならない」、「ワーカーが治療的な方向づけをもったケースワークのほうへと動けば動くほど、自己認識をもつことと、より一層完全に自己を利用することがますます強く要求されるのである」と、援助には援助者の自己を利用することが求められ、そのために「ワーカーに関する知識（自己認識）」が必要となるという。G.ハミルトン 四宮恭二監修 三浦賜郎訳『ケースワークの理論と実際（上）』有斐閣 p64、p67、p64 1960 参照。
- 3) F.P.バイスティックは、「情緒のレベルにおいては、クライアントの受容は必ず、ケースワーク関係における自己の活用を伴ってくる。そして専門的に目的をもった自己の活用は、自己についての知識をつうじてのみ達成できるものである」と、ワーカーの自己の活用をクライアントの受容という問題において指摘している。F.P.バイステック 田代不二男、村越芳男訳『ケースワークの原則』誠信書房 p132 1965
- 4) 尾崎新『ケースワークの臨床技法』誠信書房 p160-172 1994
- 5) 例えば、仲村（1964）は、ケースワーカーのクライアントに対する逆転移を防止するためには、ケースワーカーの自己覚知（もしくは自己認識 self-awareness）が不可欠とし、そのような自己覚知を得る方法としてスーパーバイザーによるケース・スーパービジョンが必要と主張した。仲村優一『ケースワーク』誠信書房 p86-87 1964

- 6) Schon D.A. *The Reflective Practitioner*. Basic Books. p49-69 1983
- 7) 澤本(1996)は授業リフレクションの形態として教師が一人で自分の授業実践をふりかえる自己リフレクション、自己リフレクションを核として複数の教師グループの中で行う集団リフレクション、メンタリングをその機能に含む対話リフレクションの3つに分けている。藤岡(2000)は、リフレクティブな授業研究を大きく「反省」と「アウェアネス」の2つの流れに分け、評価の基準が前もって存在しており、あらかじめ立てられた授業の計画との関係に焦点を当て、教師における指導の共通性や一般性を見出す「反省」が目的とされる澤本らの立場を批判し、むしろ計画や目標が自分の授業における経験にどのように作用しているかがリフレクションの対象とされるべきと言い、教師の「見え」の世界を教師自身が探求しこれまで意識されなかった次元における気づき(アウェアネス)を得ることを目的とする授業リフレクションを提唱する。上記論者のリフレクションにおける定義や議論は、福祉領域においてR・Aを進めるうえで、示唆に富むものである。藤岡完治『関わることへの意志』国土社 2000、澤本和子・お茶の水国語研究会編『わかる・楽しい説明文授業の創造—授業リフレクション研究のススメ』東洋館出版社 1996を参照
- 8) 須藤八千代「ソーシャルワークの経験」尾崎新編『「現場」の力』誠信書房 p48-54 2002
- 9) 大山博幸「リーダーの指導的役割に関する研究—特別養護老人ホームでのケースカンファレンスを事例として—」『日本教師学会誌第3号』p1-12 2001
- 10) 真鍋智江「リフレクション・ツールを活用した介護技術教育の実践から—学生による評価をきっかけとして見えてきた新たな課題—」『東海女子短期大学紀要第31号』p61-67 2005
- 11) Schon D.A. *ibid.* p50-59
- 12) 中村雄二郎『臨床の知とは何か』岩波新書 p133-140 1992
- 13) 山本(1990)はA.ジオルジの提唱する「現象学的アプローチ」は、対人援助といった領域において、生きた人間の理解やケアを目指す際に適切な方法論となるであろうことを指摘している。山本恵一「研究方法論としての現象学的アプローチ」『看護研究』Vol.23 No.5 p3 1990参照。なお、A.ジオルジの「現象学的アプローチ」については、A.ジオルジ 早坂泰次郎監訳『現象学的心理学の系譜』勁草書房 1981、A.ジオルジ 早坂泰次郎監訳『心理学の転換』勁草書房 1985参照
- 14) 自己リフレクションの手順においては、藤岡(1993、2000)を参考にし、それに修正・追加を行なった。藤岡完治「授業の自己改善のための記録と分析」『看護教育 34(10)』p731、藤岡(2000)前掲書p149-151 1993
- 15) Pile sorting の手法については、Susan C.Weller, A.Kimball Romney *Systematic Date Collection*, SAGE Publications 1988 参照

Summary

A helping profession seeks to be aware of himself, because he must improve his helping action for his clients. In this study I suggest Reflective Approach(R.A.),the way that a helping profession can acquire his self-awareness on his practices with his clients. R.A. is described on the methodology as "Phenomenological Approach" and "Cognitive=mind-body Approach". Here, I show a case study as the practice of R.A. for the process to acquire his self-awareness, and the significances of that. R.A is suggested as a kind of supervision; therefore, this is a procedure for learning to helping professions.